

コロナ下における「介護留学生」の生活と健康

— 日本福祉教育専門学校の留学生を対象とした配布票調査から —

齊藤 美由紀¹⁾ 大野 俊²⁾

¹⁾ 日本福祉教育専門学校

²⁾ 清泉女子大学文学部地球市民学科教授・同大学人文科学研究所長

The Daily Lives and Health of International Students in the Care-giving Field during the COVID-19 Pandemic: Outcome of a Questionnaire Survey of Overseas Students of Japan Welfare Education College

Miyuki Saito¹⁾ Shun Ohno²⁾

¹⁾ Japan Welfare Education College

²⁾ Professor, Department of Global Citizenship Studies, Seisen University ; Director, Research Institute for Cultural Studies, Seisen University

Abstract : The global spread of COVID-19 infections has had a big impact on the lives of international students studying at training institutions for certified care workers in Japan. Most of those students have worked as part-time workers at elderly-care facilities where a number of COVID-19 cluster infections occurred amid the COVID-19 pandemic. Thus, they have had to face various problems such as increased job stresses, learning-related difficulties due to online lessons, and serious concerns over the health conditions of their family members remaining in their countries of origin. In order to identify their various problems related to daily life and mental health during the pandemic, the authors conducted a questionnaire survey of overseas students of Japan Welfare Education College, where one of the authors works as a lecturer. The results clearly showed that 92.7% of respondents said their part-time job required them to seriously focus their attention, and 85.2% said it had affected their daily lives. The survey also revealed that 59.8% of respondents suffered from sleeplessness and mental stress, and experienced a lack of confidence in their own health.

Key Words : COVID-19, Care work, International students, Life, Mental health, Stress

抄録 : 新型コロナウイルス (COVID-19) の地球規模の蔓延は、日本各地の介護福祉士養成施設に通う留学生の生活にも大きな影響を与えた。大半の留学生がアルバイトで働く高齢者介護施設では、クラスター感染が相次ぎ、緊迫した状況となった。留学生たちは介護施設での仕事上のストレス、オンライン授業に切り替わったための学習上の困難、母国に残した家族への懸念など、様々な困難な状況に直面した。こうしたコロナ下での彼らの日常生活や健康上の問題などを解明するため、筆者が教員として勤務する日本福祉教育専門学校で学ぶ留学生を対象に配布票調査を実施した。その結果、回答者の92.7%がアルバイトでかなり注意を集中する必要があると回答し、85.2%が自身の日常生活に影響を及ぼしていたことが明らかとなった。また、こころの健康状態については、不眠やストレスを抱え、自身の健康状態に自信をなくしていた留学生が59.8%いたことも明らかとなった。

キーワード : 新型コロナウイルス、介護、留学生、生活、精神的健康、ストレス

はじめに

2020年初頭に始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の蔓延は、介護福祉士養成施設に通う「介護留学生」（以下、留学生）の生活に大きな影響を与えた。留学生の大半がアルバイトで働く介護施設では、クラスター感染の件数が甚大であり、緊迫した状況であった。そのため、留学生本人が新型コロナウイルスに感染した場合や濃厚接触者に該当した場合には、介護サービス利用者への感染拡大防止のため、出勤を停止しなければならない。そのことから、アルバイトで生計を立てている留学生にとっては、収入の減少により、経済的困難さを抱える学生も数多くいた。

また、新型コロナウイルスに感染または陽性症状が出現した場合、日本人学生と比べると家族や親族等からの直接的支援が受けられないことから、留学生の不安や精神的苦痛は大きかったことが推察される。実際、コロナ下において抑うつ状態に陥る者も存在した。病院への受診時等では、言語の障壁により、自身の身体の症状を正確に伝えられないことや、相談支援機関等への連絡がスムーズに出来ないこと、コロナに関する情報を得られにくいことなども、不安や孤独感を増し、精神的苦痛に大きく影響したものと考える。

さらに、多くの介護福祉士養成施設でも、演習科目を除く複数の科目において、オンライン授業やオンデマンド授業へと切り替わり、学生の学習状況も一変した。留学生にとって、学校で対面授業を受けることは、日本人学生を通じて、日本語レベルの向上が期待できることや日本文化への理解が深まるなど、学習面以外の価値は大きい。

また、多様な学生の集団の中で、異なる文化や意見、違いを受け入れて、人間的成長を遂げることは、介護福祉実践の場で個別ケアを実践する上でも非常に大きな意味がある。この点について、村田（2022）は、「オンライン授業は国境を越えた学びの可能性を広げたものの、留学は勉学だけを指すわけではなく、現地での生活体験、友人作り、様々な社会経験（サークル、アルバイト、インターシップなど）も非常に重要な意味を持つ。」¹⁾と論じている。実際のオンライン授業では、多くの留学生がスマートフォンを使用して受講していたことから、「画面が小さく

てとても疲れた。」「授業についていけなかった。」等、学習の困難さの訴えもあった。

しかしながら、留学生はこのような経済的困窮や精神的苦痛等を抱えていたにもかかわらず、それらの困難な状況を跳ね返し、乗り越えていた事実も存在する。「レジリエンス」（resilience）はもともと工学や物理学の分野からの概念であり、その定義は多様であるが、心理学における「レジリエンス」とは、困難や脅威に直面している状況に対して、「うまく適応しながら成長する能力」を意味している。全米心理学会（2008）によると、「逆境や困難、強いストレスに直面したときに適応する精神力と心理的プロセス」と定義されている。つまり、「回復力」、「緩衝力」、「適応力」などを指している。

本学の留学生は、コロナ下においてどのような日常生活を過ごしていたのか、また、ストレスや精神的健康はどのような状態であったのか、さらには様々な困難状況をどのように乗り越えていたのか等、コロナ下における彼らの生活と健康について多面的に調査する必要があると考えた。

新型コロナウイルス感染症が外国人留学生へ与えた影響については、既に数多くの先行研究があるが、その多くは一般大学の外国人留学生を対象としたものであり、専門学校についてはコロナ禍の入学制限が入学人数に影響を与えた研究やオンライン学習支援への取り組みに関する研究に止まり、介護福祉士養成施設に通う留学生の生活と健康に焦点を当てた調査研究はあまりみられない。そこで、本研究は、介護福祉士養成施設である本学の留学生を対象に、コロナ下における彼らの生活や健康について配布票調査を実施し、その実態を明らかにすると共に、今後の支援の在り方について検討する。また、本調査の対象となる留学生の大半が介護施設でアルバイトを行っていることから、主に介護施設でアルバイトを行っている留学生を取り上げてみていく。

1. 急増する「介護移民」の中の「介護留学生」と彼らのコロナ禍体験

新型コロナウイルスの地球規模の感染拡大は各方面に大きな影響を与えた。感染した際の死亡率が高い高齢者が入居・利用する介護施設において、その影響は甚大であった。例えば、世界最多の死亡者を

出した米国においては、2023年8月27日までに全国のナースィングホームで計170万2,637人の入居者が感染し、うち約1割にあたる16万7,683人が死亡した、との公的データがある²⁾。

日本では2022年秋までは高齢者施設入所者のコロナ感染による死亡は欧米諸国に比べて顕著に抑えられていた。ところが、日本で感染第8波が起きた2022年11月～2023年1月においては高齢者施設でクラスター感染が約6,000件も発生し、1日に500人以上の死亡者が出る時期もあった。その9割超が70歳以上で、高齢者施設での感染・死亡が目立った³⁾。

こうした高齢者施設では近年、外国籍の介護人材が増加傾向にあった。彼らは、コロナ禍期間も旺盛な介護需要に沿う形で増え続けた。中でも、2019年度に新設された「特定技能」は、厳しい出入国規制で日本国内に滞留し続けた技能実習生らの在留資格変更の絶好の受け口となり、急増した。コロナ下の経済活動規制で雇用が冷え込んだサービス産業などと違って、安定的な雇用状況が続いた介護分野での増加幅は特に大きく、特定技能1号の在留資格を持つ同分野の外国人は2023年6月末時点で21,915人になり、コロナ禍開始時期（2020年3月末時点で56人）の400倍近くになった⁴⁾。

技能実習生も2017年に新たに追加された介護分野で2021年までは急増し、同年3月には技能実習認定計画の認定件数は12,068件を数え、過去最多を記録した⁵⁾。この数は、その1年後には8,384件に大幅に減少する⁶⁾。これは、最長で5年間、日本で勤務できる特定技能に在留資格を変更した技能実習生が続出したためとみられる。

これ以外、日本政府がインドネシア・フィリピン・ベトナムの3カ国政府の間で締結した経済連携協定（EPA）に基づいて来日の介護福祉士候補者と国家試験合格を果たして介護福祉士の資格を持つ者が日本各地の介護施設で勤務している。共著者がこの事業の実施主体である国際厚生事業団から得た情報では、2023年1月時点で「特定活動」の在留資格で日本に滞在する3カ国のEPA人材の数は計3,252人である。

一方、卒業して「介護」の在留資格を得られる専門学校などの介護福祉士養成施設で学ぶ留学生（いわゆる「介護留学生」）の入学者数も2020年春まで

は年を追って増え続け、同年の入学全学生の34%を占めた（図1参照）。

これらの留学生の多くは、日本各地にある日本語学校で1～2年間、日本語を学んだあとに専門学校や大学に入学するケースが多い。コロナ禍は新規留学生の日本留学を困難にし、日本語学校への留学生の激減を招く結果となった。これに伴って、介護留学生の新規入学者も2021年と2022年は減少傾向をたどった（同上）。

こうした介護留学生は、コロナ禍で様々な困難を抱えることになった。彼らが学ぶ学校ではクラスター感染を怖れてオンライン授業に切り替えて教育を実施したところが大半である。しかし、自宅にWi-Fiがなかったり、パソコンの備えがない留学生はスマホでの受講となり、学習効率が低下したという留学生が多かった。また、介護施設で実施する介護実習もできず、介護業務に必須である日本語によるコミュニケーション能力習得面でハンディを抱えることになった。

留学生たちは、就学資金保証人先の寮やアパート等で複数入居で生活しているケースが大半である。コロナ下でも、毎日のように介護施設を中心とする現場でアルバイトをしていて、一人がコロナ感染すると、同居の学生も感染したケースが多い。

共著者は感染第7波の初期である2022年7月11日に関西の介護専門学校や介護施設を訪ね、ベトナム人の介護留学生6名（男女各3名）と技能実習生・特定技能生5名（全員女性）とそれぞれグループ・ディスカッションを実施した。そこで、介護留学生は感染したらアルバイト先から解雇を迫られるなど雇用が不安定で、また感染時のサポートも職場からほとんど得られていないことがわかった。一方、正規雇用の技能実習生や特定技能生は職場では定期的にPCR検査を受けて体調管理がなされ、感染時には有給の休暇扱いだった。コロナ禍期間を通して、介護留学生は日常生活・雇用の両面で相対的に不安が大きいことを確認した。

2. 研究方法

(1) 目的

本研究は、日本福祉教育専門学校の介護留学生を対象に、コロナ下における介護留学生の日常生活と



図1 日本全国の介護福祉士養成施設に入学の新入生の全学生と留学生の数の推移（2017年度～2022年度）

（出典）日本介護福祉士養成施設協会、2022などをもとに共著者作成。

精神的健康について調査し、その実態を明らかにすると共に、パンデミックな状況に置かれた留学生に対し、今後どのような支援が必要であるかについて検討することを目的とする。

（2）対象

2022年7月15日～2022年7月22日に、当時、日本福祉教育専門学校の介護福祉学科に在学していた留学生全員86名（2年生42名、1年生44名、出身は主にベトナム、中国などを中心とした東アジア・東南アジアの国・地域）を対象に実施した。

（3）調査方法

調査票は、次のⅠ～Ⅶ群、計63の質問項目から構成されている。調査を実施するにあたり、日本語を母国語としない調査対象者が調査票をより正確に理解できるよう、読み合わせを行いながら進めると共に、必要に応じて個別に日本語の説明を行い、実施した。

- Ⅰ 属性
- Ⅱ 現在アルバイトをしている状況について
- Ⅲ 新型コロナウイルス感染症の影響について
- Ⅳ 自分自身の人生の感じ方について
- Ⅴ アルバイトの仕事に関連するストレスについて
- Ⅵ 周りの人々とのかかわりについて
- Ⅶ 2～3週間前から現在までのこころの健康状態について

（4）解析方法

本研究において使用した統計は、主として、単純集計、カイ二乗検定、t検定、ピアソンの積率相関係数である。次節以下の統計処理においては、有意水準を5%として有意なもののみを示す。

（5）倫理的配慮

本研究は、長崎大学 医科薬学総合研究科（保健学系）の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号20091005）。

調査票は、個人が特定できないよう無記名とし、調査目的、得られたデータの活用方法、調査結果については個人が特定できないようまとめる旨を、口頭と文章で説明した。

3. 結果

回答は86名中85名から得られ、回答率98.8%となった。

（1）属性

性別は、男性25%、女性75%であり（図2）、年齢は、21～22歳が最も多く、平均年齢は24.93歳であった（図3）。滞日期間（月換算）は、13～18ヵ月が最も多く、平均29.89ヶ月であった（図4）。同居者の有無については、ほぼ同等であった（図5）。シェアハウスに居住している者も多いが、ここでは個人の居室に同居者がいるかどうかに対する回答である。

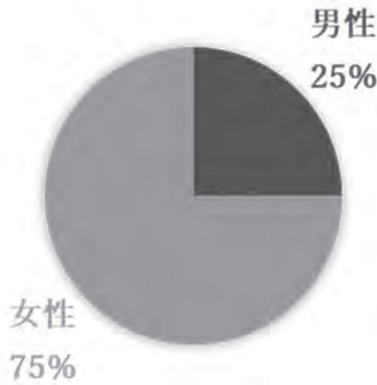


図2 性別

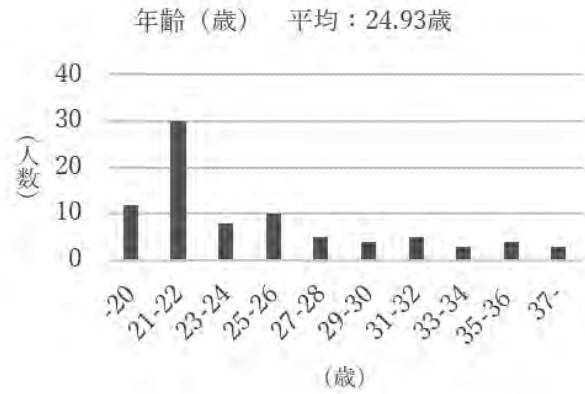


図3 年齢

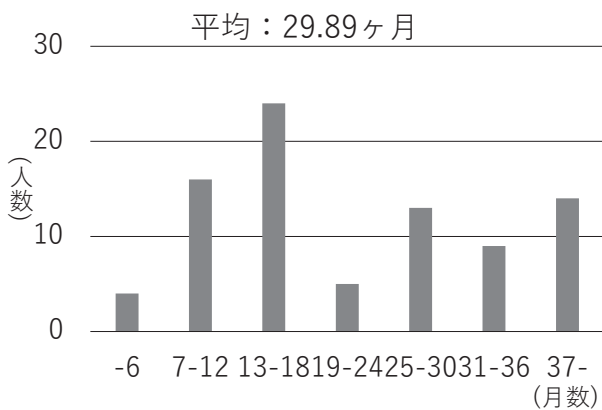


図4 滞在期間

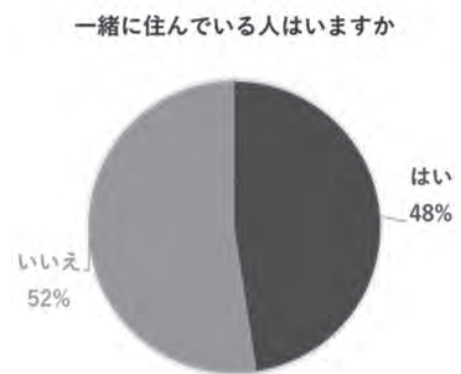


図5 同居者の有無

(2) 現在の介護のアルバイトについて

(a) 介護のアルバイトをしている期間

介護のアルバイトをしている者は、回答者85人中79人(92.9%)であり、アルバイトの期間は、13-18ヵ月が31人(39.2%)で最も多く、次いで6ヵ月以下が21人(26.6%)、19-24ヵ月が8人(10.1%)であり、平均16.66ヵ月であった(図6)。本データから79人中68人(86.1%)の者がコロナの蔓延後に介護のアルバイトを始めたということが読みとれる。

(b) 介護のサービス種別

特別養護老人ホームが最も多く56%であり、次いで老人保健施設と有料老人ホームが同等であり、以下グループホーム、病院の順であった(図7)。

(c) 介護のアルバイトで大変なことは何か

「かなり注意を集中する必要がある」が92.7%であり、次いで「一生懸命働かなければならない」が85.6%、「仕事中はいつも仕事のことを考えていなければならない」が84.1%であった(図8)。

この結果から、コロナ下における介護のアルバイトではかなり注意の必要と精神的負担を感じながら従事していたことがわかった。

(d) アルバイトをやってみて感じたことは何か

「自分のペースで仕事ができる」が69.5%、次いで、「自分で仕事の順番・やり方を決めることができる」が63.4%、「職場のやり方に自分の意見を反映できる」が62.2%であった(図9)。

(e) アルバイト先の人間関係について

「職場の雰囲気は友好的である」が最も多く、85.4%であった(図10)。部署や職員間で意見の食い違いがあると回答したものが34.1%いるものの、大半の留学生が日本人介護職員と友好的な雰囲気の中で仕事をしていることがわかった。

(f) アルバイト先での介護の仕事をどう思うか

「仕事の内容は自分に合っている」「働きがいのある仕事」と感じながら、仕事に従事している留学生

が8割以上いることがわかった(図11)。当初の介護留学の目的が、ただ日本で生活したいという曖昧な目的であったとしても、アルバイトの仕事に従事する過程で、介護の仕事に対する見方や考え方に变化がもたらされ、適職として捉えていることがうかがえる。

(3) 新型コロナウイルス感染症の影響について

(a) コロナの感染状況と職場におけるケアの状況について

2020年初頭以降、2022年7月(調査実施日)迄の期間に、「新型コロナウイルスに感染したことがある」と回答した者が30.5%、「同居者で罹患した人がいる」と回答した者が39.5%、「職場でコロナ患者をケアしたことがある」と回答した者は17.6%であった(図12)。

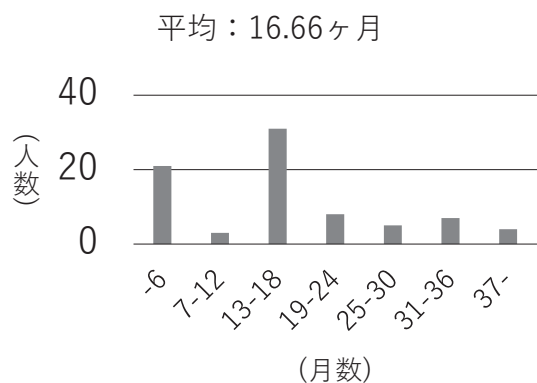


図6 アルバイト就業期間

コロナに感染したことがあると回答した者は約3割であるが、あくまで病院に受診し、医師の診断がなされた者を示す。また、約2割の者がアルバイトであっても正職員同様にコロナ患者のケアをしていたことが明らかとなり、自宅においてもアルバイト先においても精神的負担を感じながら日常生活を過ごしていたことがうかがえる。

(b) コロナが自身の生活に及ぼした影響について

「コロナ禍によって自身の生活にどの程度影響を受けたと感じるか」は、「とても感じている」と「少し感じている」を合わせると、85.2%の者が自身の生活に何かしらの影響を及ぼしたと回答。「今からコロナ感染者が増えることについてどのくらい不安か」は、「とても感じている」と「少し感じている」を合わせると、85.3%の者が不安を感じながら日常

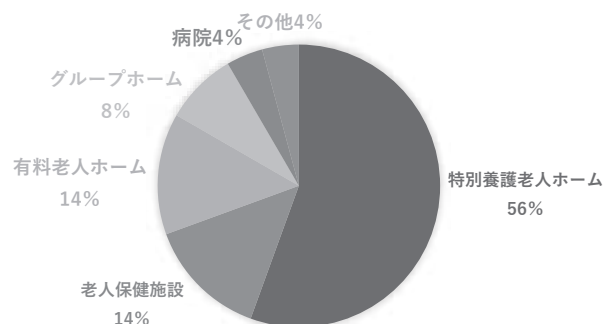


図7 アルバイトの介護サービス種別

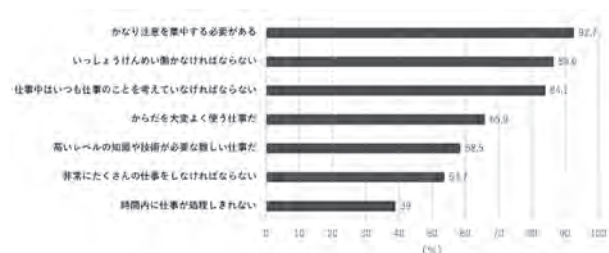


図8 アルバイトで大変だと思うこと

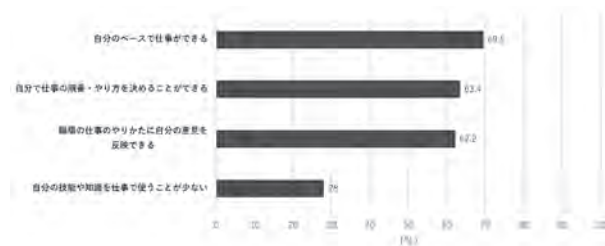


図9 介護のアルバイトで感じたこと

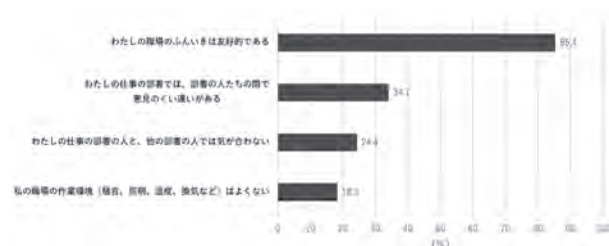


図10 アルバイト先での人間関係

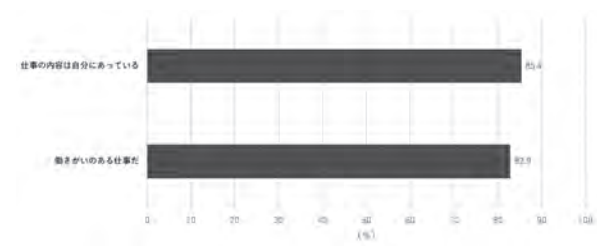


図11 アルバイト先での仕事をどう思っているか

生活を過ごしていたことが明らかとなった。

また、「コロナ禍によってオンライン授業となり、どのくらい大変であったか」については、64.2%の者が大変さを感じていたことがわかった（図13）。

(4) 周囲の人々とのかかわりについて

(a) 非常に / かなり気軽に話をできる相手は誰か

「家族や友達」が91.4%で最も多く、次いで、「職場の同僚」が68.4%、「学校の先生」が60%であった（図14）。

(b) 困ったとき、頼りになる相手は誰か

「家族や友達」が90.1%で最も多く、次いで、「学校の先生」が49.4%、「職場の同僚」が42.3%であった（図15）。上記（4）（a）の質問では「気軽に話をできる人」の第二位が「職場の同僚」であったが、「困ったとき、頼りになる人」の第二位に「学校の先生」を挙げている。その理由として、留学生の発熱症状や心身の体調不良を訴えた際には、迅速に相談支援機関へ繋げるサポートや状況に応じて受診同行を行うなど、学習のサポートのみならず、生活全般に対し、教職員が出来ることを支援してきたことが考えられる。

(c) 個人的な問題を聞いてくれる相手は誰か

「家族や友達」が87.5%で最も多く、次いで、「学校の先生」が53.1%、「職場の同僚」が35.4%であった（図16）。

(5) 周囲の人々と自身のこころの健康について

(a) 2 - 3週間前から現在（調査実施日）迄のこころの健康状態について

（12項目中1～4番までを表記）

「自分のこころの健康に自信をなくした」は59.8%で最も多く、次いで「心配事があってよく眠れない」が57.3%、「問題を解決できなくて困った」が53.7%、「いつもストレスを感じた」が52.4%であった（図17）。いずれも、コロナ下において半数以上の者が自分のこころの状態に自信をなくしたり、不安やストレスを感じていたことがわかった。

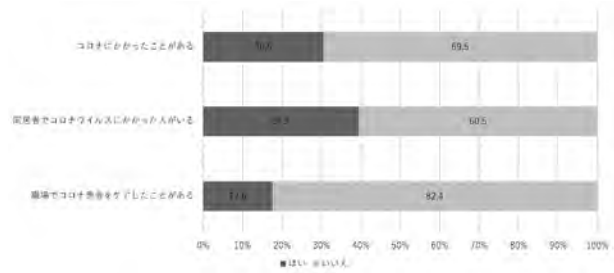


図12 コロナの感染状況と職場におけるケアの状況

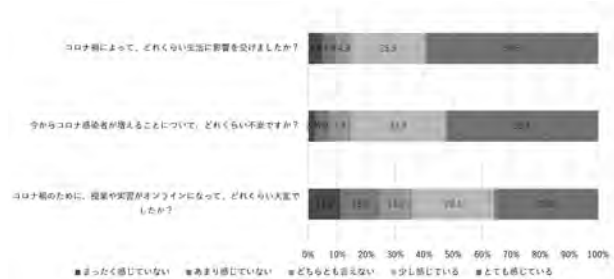


図13 コロナが自身の生活に及ぼした影響

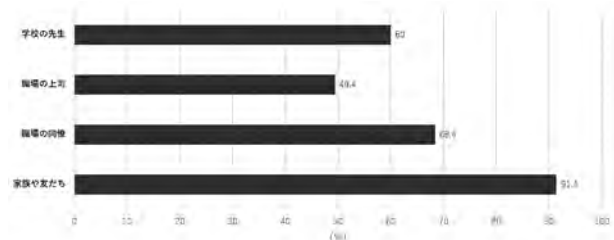


図14 気軽に話をできる相手

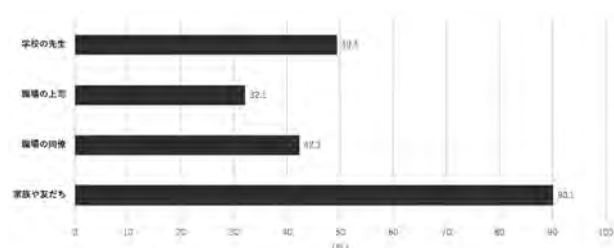


図15 困ったとき頼りになる相手

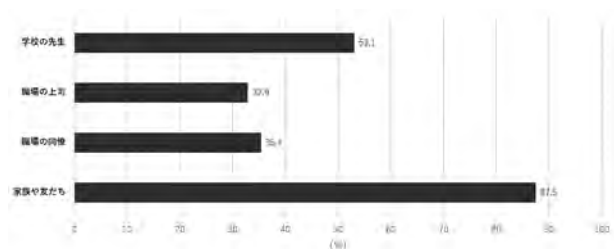


図16 個人的な問題を聞いてくれる相手

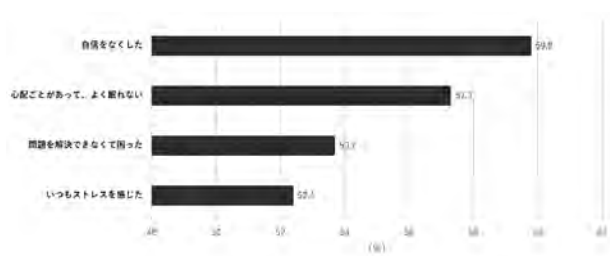


図17 2-3週間前から現在迄のこころの健康状態

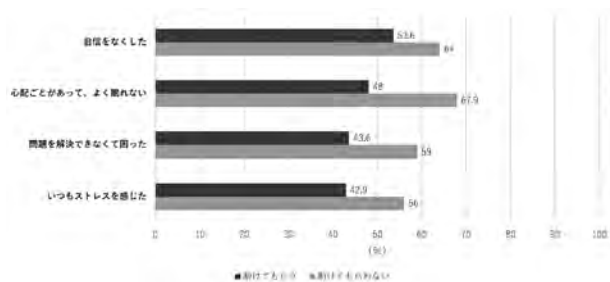


図18 学校の先生の支援の有無とこころの健康状態との関連性

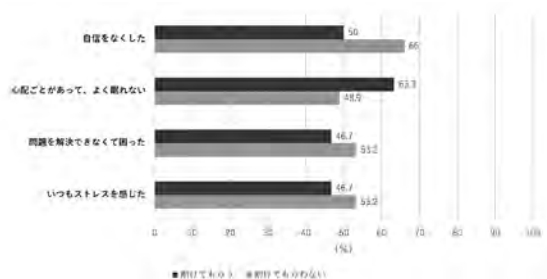


図19 アルバイト先の上司の支援の有無とこころの健康状態との関連性

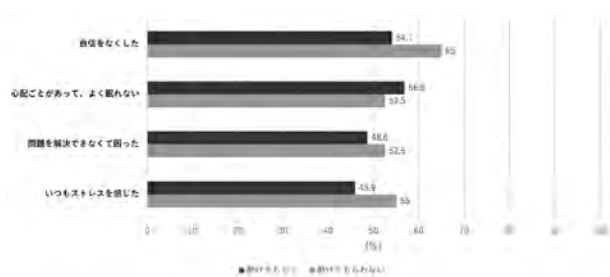


図20 アルバイト先の同僚の支援の有無とこころの健康状態との関連性

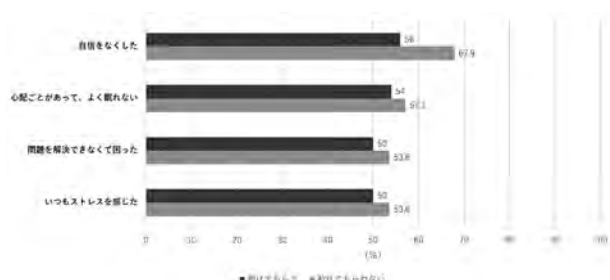


図21 家族や友達の支援の有無とこころの健康状態との関連性

(b) 学校の先生の支援の有無とこころの健康状態について

「学校の先生に助けてもらう人」と「助けてもらわない人」のこころの健康について比較を行ったところ、助けてもらう人とそうでない人では、こころの健康の有意な差はみられなかった(図18)。

(c) アルバイト先の上司の支援の有無とこころの健康状態について

アルバイト先の上司に助けてもらう人とそうでない人では、こころの健康の有意な差はみられなかった(図19)。

(d) アルバイト先の同僚の支援の有無とこころの健康状態について

アルバイト先の同僚に助けてもらう人とそうでない人では、こころの健康の有意な差はみられなかった(図20)。

(e) 家族や友達の支援の有無とこころの健康状態について

家族や友だちに助けてもらう人とそうでない人では、こころの健康の有意な差はみられなかった(図21)。

(6) 本学留学生のレジリエンス

レジリエンス(しなやかさ)については、ストレスに対処する能力を表す概念であるSOC(首尾一貫感覚:sense of coherence)の指標を採用し、SOCの構成要素である、自分の置かれている状況を一貫性のあるものとして理解する「把握可能感」、困難やストレスに対処するための資源や能力が自分には備わっているという「処理可能感」、自分の人生や出来事には意味があり、時間や労力など一定の犠牲を払うに値するという「有意味感」の三つの感覚指標から検定した。

その結果、日本人医療者の平均値が52.9点(田中らによる研究、2021)⁷⁾であったのに対し、本学留学生の平均値は56.0点であった。これは、日本人医療者と比較すると、本学留学生の方がストレスに対処する力を持っているという結果となった。

4. 考察

本研究では、コロナ下における介護留学生の生活と健康について、その実態を明らかにした。

アルバイトでの介護の仕事については、92.7%の者が「かなり注意を集中して仕事をする必要がある」と回答しており（図8）、介護サービス利用者への感染拡大防止と自身の感染対策にかなり注意を集中させ、仕事に従事していたことがわかった。また、介護のアルバイトをしている期間は平均16.66ヵ月であり（図6）、86.1%の者がコロナの蔓延後に介護施設でアルバイトを始めたということが明らかとなった。つまり、平常の介護業務を知らないまま、コロナ下の介護業務を経験していたということである。さらに、介護に関する知識や技術もまだ浅い中で、約2割の者はコロナ患者をケアしていたことも明らかとなり（図12）、仕事上のストレスや不安等、精神的負担は非常に大きかったことがうかがえる。

飲食店やコンビニ等でアルバイトをする留学生の精神的負担と比較したとき、介護施設でアルバイトをする留学生は、自身が感染した場合、感染リスクの高い高齢者の生命に直接的に影響を及ぼす危険があることから、他分野のアルバイトとは異なるストレスや精神的負担があったものと推察する。

コロナが自身の生活にどの程度影響を及ぼしたかについては、85.2%の者が生活に何かしらの影響を受けたと回答しており（図13）、「今からコロナ感染者が増えることについてどのくらい不安か」についても、85.3%の者が自身の生活に不安を感じながら過ごしていた（図13）。約半数の者は、複数の同居者と生活している環境下（図5）、自身が感染した者は30.5%、同居者が感染した者は39.5%いたことから（図12）、自身の感染への不安と共に同居者との接触にも細心の注意を払いながら日常生活を過ごしていたことがうかがえる。また、奨学金保証人先でもあるアルバイト先の介護施設の寮やシェアハウスにおける共同スペースでの接触や、介護サービス利用者への感染拡大防止のために、アルバイト先からのプライベートにおける行動制限等も介護留学生に特徴的にみられる精神的負担増となったことと思われる。

さらに、自身の感染または濃厚接触者に該当したことで、アルバイトを一定期間休まざる得ない状況

となり、そのことから経済的困窮に陥っていた留学生もいたことがわかった。第1章でも述べた通り、介護施設で働く正規雇用の介護職員や技能実習生、特定技能生が感染または濃厚接触者に該当した場合は、有給の休暇扱いとなることが多いが、介護留学生の場合は無給で一定期間休まなくてはならない現状であった。そのことから正規雇用の介護職員とは異なる不安を抱き、感染に対する危機感はより大きかったと推察する。

自身のこころの健康状態については、59.8%の者が「自信をなくした」と回答。心配事がありよく眠れない者、問題を解決できず困った者、いつもストレスを感じていた者がいずれも半数以上いたことが明らかとなった（図17）。

コロナ禍のオンライン授業等に対し負担を感じていた留学生は、64.2%存在した（図13）。パソコンやタブレット等の情報機器を保有する者は少なく、ネット環境も悪い中、スマートフォンで受講をしていた者が半数以上いたことから、資料が見えづらく、音声や画面が途切れ途切れになり、授業に集中することやレポート作成が困難な状況であったと思われる。また、同室に同居者がいる中での受講は、同居者への気遣いなどのストレスもあったものと推察する。

以上の調査結果から、本学留学生がコロナ下の日常生活において、生活環境、アルバイト、学業、経済、健康、母国の家族への懸念等、ありとあらゆる場面で注意を集中させ、様々な不安やストレスを抱え、精神的苦痛を感じながら日々過ごしていた状況を確認した。

一方で、図18～図21で示した「周囲の人々ところの健康状態との関連性」では、「学校の先生」「アルバイト先の上司」「アルバイト先の同僚」「家族や友達」、それぞれの支援の有無とところの健康状態に有意な差はみられなかった。また、本学留学生のレジリエンスは、日本人医療者よりも高い数値を示した。医療者はコロナなどの感染症や危機的な状況に直面することも多いことから、日本人医療者のレジリエンスの方が高いという推測をしたが、それを上回る結果となった。

なぜ、本学留学生のレジリエンスが高いのか。周囲の人々の支援の有無にかかわらず、コロナ下にお

ける様々な困難を克服してきた要因は何であろうか。

村松（2022）が「レジリエンスは文化や国によって影響を受けやすい」⁸⁾と論じているように、もともと個人が持っている「素質的要因」に関係しているだけでなく、母国における社会的背景や文化、家族関係、集団、人々とのかかわり、挫折、困難、支え合い、喜び等、彼らを取り巻く環境や様々な経験の中から、自身の置かれている状況を的確に受け入れ、そこに意味や価値を見出し、困難に立ち向かう力を備えてきたのではないかと考える。

留学生のその力は、学校生活における様々な場面でも見られる。例えば、介護実習での苦しい状況に陥った場合であっても、途中で逃げずに最後までやりきる粘り強さがある。また、学習態度やルールを守らないことに対し、教員が叱咤激励した直後であっても、笑顔で明るく話しかけてくる場面が多々ある。日本人学生にはこのような行動はほとんど見られず、留学生特有のストレングスとも言える。彼等は目の前の状況をいったん受け止めているものの、そこに止まることなく、気持ちの切り替えをスピーディーに行い、先に進める力を持っているのかもしれない。

また、もう一つの要因として、介護のアルバイトの特質とも言える「役割取得」(G. H. ミード)というものが自身の困難さを跳ね返す大きな力になったのではないだろうか。介護福祉の仕事とは、人を支える仕事である。どのような状況下であっても、サービス利用者一人ひとりの生命を守り、これまでの生活を継続させていかなければならない。ゆえに、サービス利用者からの期待を自らに取り入れ、利用者を支えるという行為が形成されていく過程で、自身の困難さを乗り越えていく力を身に付けてきたのではないかと考える。時に、人間の底力というものは、自分のためではなく、他者から頼りにされ、他者のために行動するとき発揮されることがある。介護福祉の仕事というのは、自分がサービス利用者を支えているようで、実は自分が利用者から支えられていると実感することが多々ある。他者に対する支援が自身の存在価値を高め、期待に応えよう、役割を全うしようとして心を奮い立たせることによって、自身の現実への困難な状況に立ち向かっていく底力が湧き出るといった特質をもっているのでは

ないだろうか。そこに、介護留学生のレジリエンスの高さと、コロナ下の困難さを克服できた要因があるのではないかと考える。

5. おわりに

日本語を母国語とする者の入学者数が減少し、今や外国人留学生の割合が多くを占める介護福祉士養成施設において、パンデミックな状況に置かれた留学生の生活や健康を支えるためには、介護福祉士養成施設として、留学生が安心して学業に集中できる環境を整備していくことが重要である。

村田（2021）は、「コロナ禍において対面を中心とした従来のサポートが十分機能しなくなった今、オンラインによるボランティア学生による学習支援とソーシャル・サポートの可能性」を挙げているが⁹⁾、学習面と生活および健康を支えるためには、ソーシャル・サポートの観点から、次のような支援をしていくことが必要であろう。

1) パソコン等情報機器の貸与など、学習面への環境整備および道具的支援、2) 経済面および健康面への支援としてフードパントリーの開催や食料品の提供、状況に応じた受診同行、3) 問題を解決するために必要な知識や正確な情報の提供、4) 居住地域の社会資源（制度、施設、公的機関、医療機関、設備等）の情報提供や案内、5) 教員だけでは対応しきれない支援を、アルバイト先の同僚・上司、地域住民、卒業生等の力を得て、国内で生活する人々とのつながりの中で孤独感や不安感を解消できるような心理的支援、6) 困惑した状況下であっても冷静な判断と適切な行動が起こせるよう、考えに対する称賛や指摘、客観的な助言、評価等、教育的支援などが挙げられるであろう。

加えて、コロナ禍のオンライン授業では、通常の対面授業に比べると学習効果を十分に上げることが出来なかったことが推測される。また、介護施設で実施すべく介護実習を学内実習へと切り替えざる得ない状況であったことから、通常の介護実習から得られる体験をしないまま、卒業した学生も多い。それらを補填するためには、コロナ禍に在学していた学生に対し、卒業後の継続教育の検討も必要である。

新型コロナウイルスのようなパンデミックな状況に限らず、現代の激動の社会を生き抜いていくため

には、強いメンタルも必要となる。山下 (2019) は、「社会に貢献できる人材を育てるために心と身体を磨く教育においても、従順さ以上に自分で考え答えを引き出す力や、それをアウトプットする力、クリティカル・シンキングを深める力が必要となる。」¹⁰⁾と論じている。

介護福祉の仕事は、高齢者や障がいのある人への身体的支援だけでなく、精神的支援も含まれることから、ストレスや精神的負担を受けやすい職業である。介護福祉士として、「人を助けたい」という気持ちや「優しさ」「温かさ」だけでは務まらず、時に押し潰されそうになることや、バーンアウトの状態に陥ることもあり得る。ゆえに、「論理的思考」と「心の強さ」を兼ね備え、目の前の困難な状況を「跳ね返す力」「適応する力」「回復する力」を高めるための教育が重要となるだろう。

最後に、山下 (2019) が「日頃の教師の接し方や集団作り、授業でのわかる喜びなどが、自尊心や自己効力感、そしてレジリエンスを高めることにつながると考えられる。」¹⁰⁾と述べている通り、筆者自身、日々の接し方や授業方法を振り返りつつ、逆境に陥っても、それを跳ね返し、乗り越える力を兼ね備えた介護福祉人材を養成するための教育方法を模索していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 村田晶子 (2022)「コロナ禍の留学生たちによる経験の言語化とソーシャルネットワーク」『多文化社会と言語教育』2、16-25.
- 2) Centers for Medicare & Medicaid Services, 2023, “COVID-19 Nursing Home Data” <https://data.cms.gov/covid-19/covid-19-nursing-home-data>. (2023年9月6日閲覧)
- 3) 読売新聞オンライン、2023年1月15日、「第8波のコロナ死者、9割超が70歳以上…高齢者施設の感染対策「特に重要」」<https://www.yomiuri.co.jp/politics/20230114-OYT1T50289>. (2023年9月5日閲覧)
- 4) 出入国在留管理庁、2023年、「特定技能在留外国人数の公表」https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri07_00215.html. (2023年9月4日閲覧)
- 5) 外国人技能実習機構、2021年、「職種別 技能実習計画認定件数(構成比)(1-4)(令和2年度)」<https://www.otit.go.jp/files/user/toukei/211001-1-4.pdf> (2022年8月20日閲覧)
- 6) 外国人技能実習機構、2022年、「職種別 技能実習計画認定件数(構成比)(1-4)(令和3年度)」[https://www.otit.go.jp/files/user/docs/\(%E4%BF%AE%E6%AD%A3%E9%BB%92%E5%AD%97.df](https://www.otit.go.jp/files/user/docs/(%E4%BF%AE%E6%AD%A3%E9%BB%92%E5%AD%97.df). (2023年9月2日閲覧)
- 7) Tanaka, K., M. Tahara, Y. Mashizume, and K. Takahashi (2021), ‘Effects of Lifestyle Changes on the Mental Health of Healthcare Workers with Different Sense of Coherence Levels in the Era of COVID-19 Pandemic’, *International Journal of Environmental Research and Public Health*, 18 (6), 2801. <https://doi.org/10.3390/ijerph1806280>.
- 8) 村松常司 (2022)「レジリエンス研究のさきがけ」『養護実践研究』4 (2)、1-2.
- 9) 村田晶子 (2021)「孤立する留学生のオンライン学習支援とソーシャルサポート—コロナ禍でのボランティア学生の取り組み—」『多文化社会と言語教育』1、14-29.
- 10) 山下節子 (2019)「しなやかな心の育て方—レジリエンス教育の活用—」『山梨大学教育学部・大学院教育学研究科紀要』69、1-8.
- 11) 大野俊 (2023)「パンデミック下における『ケア移民』のライフストーリー—日本の介護現場で働く移住労働者たちのコロナ禍体験—」『清泉女子大学紀要』70、97-111.
- 12) 大野俊 (2023)「パンデミック下での『介護移民』社会の変容—本ラウンドテーブル (RT) の趣旨と数的動向—」(6月25日、神田外国語大学での日本移民学会第33回年次大会ラウンドテーブル・セッションでの発表資料)
- 13) 尾崎寛幸・久野弓枝 (2021)「新型コロナウイルス感染症が外国人留学生に与える影響とサポート体制の検討—札幌大学の外国人留学生を対象にして—」『札幌大学研究紀要』1、207-230.
- 14) 川西英二 (2021)「コロナ禍における留学生教育の課題—日本語学校、専門学校の現場からの報告—」『立命館大学地域情報研究所紀要』10、78-90.
- 15) 岸田由美・陸哈子・薛芸 (2022)「コロナ禍における留学生の経験と困難—金沢大学留学生を対象としたアンケート調査の結果から—」『金沢大学国際機構紀要』4、75-91.
- 16) 佐々木駿輔・渡辺明日香 (2021)「医療従事者のストレス軽減とレジリエンス—オンライン介入法を用いたランダム化比較試験に関する文献検討—」『北海道文教大学研究紀要』45、83-106.
- 17) 出入国在留管理庁、2023年、「特定技能在留外国人数の公表」https://www.moj.go.jp/isa/policies/ssw/nyuukokukanri07_00215.html. (2023年9月4日閲覧)
- 18) 日本介護福祉士養成施設協会、2022年、「介護福祉士養成施設への入学者数と外国人留学生(平成30年度から令和4年度)」https://kaiyokyo.net/news/r4_nyuugakusha_ryuugakusei.pdf. (2023年8月30日閲覧)
- 19) ヌルガリエヴァ・リヤイリヤ・昔宣希・清田智子等 (2022)「コロナ禍における留学生への影響及び長崎大学の支援の実態—アンケート調査の結果から—」『多文化社会研究』8、409-423.
- 20) 村田晶子 (2022)「コロナ禍の日本留学—外国人留学生の孤独とレジリエンス—」『多文化社会と言語教育』2、1-15.

受付日：2023年9月10日

受理日：2023年11月10日

